SHIEN No.4
2013 8/10
支縁（しえん）
http://www.kisokobe.com
神戸国際支縁機構（KISO）季刊誌
【発行人】 岩村義雄 〈携帯 070-5045-7127〉
【事務局】 〒655-0049 神戸市垂水区狩口台5-1-101
Tel(078)782-9697 Fax(078)784-2939
E-mail:kiso@mbe.nifty.com
【石巻支所】 阿部捷一（しょういち）
〒986-2121 宮城県石巻市渡波町3-5-37
Tel(0225)24-3107
E-mail:cp.abe@royal.ocn.ne.jp
年4回 2月、5月、8月、11月
購読料 一部320円＋送料80円（年ぎめ 1,600円）

「支縁」の輪

神戸国際支縁機構 理事
東京大学名誉教授
島薗（しまぞの） 進

猛暑の中、被災者の苦難が続いている。「復興」の波にのった方もおられるだろうが、取り残されるように感じている方々も多い。とりわけ福島原発被災地ではそうだ。東北の地は遠く感じる方が多い。行くのに費用もかかる。それだけに支援者の来訪が待たれている。神戸では阪神・淡路大震災の記憶が生きている。その神戸からこその、宗教・宗派を超えた協力による持続的な支援活動は、東日本大震災の被災地の方々への力強い励ましになっていると信じる。そしてその活動は全国各地の支援者の活動と響き合って、「支縁」の輪を広げている。東京の私たちもその恩恵に浴している。

傾聴ボランティア

吉川 潤

「社会的弱者に笑顔を そして共生」

心の復興が軽んじられています。宮城県石巻市渡波で夜、眠る時、静まると遠くの波の音が聞こえてきます。すると、あの3．11のどす黒い津波が襲ってくるのがよみがえります。今でも余震があります。東北は地鳴りもします。ゴォーと不気味な音で体がすくんでしまいます。海岸線に警報がなります。しかし、連絡網がありません。自治体もまだできていない地域もあります。高齢の方、障がいをお持ちの方はおろおろするばかりです。震災後、行方不明、後追い自殺、蒸発した人も少なくありません。旧渡波地域の国道398号線では車の往来がめまぐるしいです。道路沿いの家屋はまだまだ倒壊しています。仮設住宅、みなし仮設に入らず、全壊した家を修繕して住まざるを得ない在宅被災者も約四千人います。そうした人々に寄り添い、共に一ヶ月に一度、お会いする働きが傾聴ボランティアです。

平塚敦子さんも波に呑まれますが、近くの家のベランダにつかまり、見ていた人に「助けて下さい」とバスタオルで繋いで命を永らえました。

「足場が悪かったし体力がある方ではないので、無我夢中ですた。今思うと、よく登ったなって思う。死（す）ぬかもしれないとは思わなかった、生ぎなきゃって。こどもと離れて（避難して）いたので、こどもを置いて死ねないと思った。」

旧渡波 松原町

避難した家で、衣類を着替えさせてもらい、辺りの水が引くまでの三日間を過ごします。

「おばの居場所はわかっていたので、自衛隊が来た時に、すぐに遺体を持ってきてもらうように依頼できたので、比較的損傷は少なくて済みました。…やっと震災のことしゃべれるようになりました」と言われました。

別の車で避難したご主人や、高校生と中学生の子どもさんについても別の場所に避難して無事だとわかったそうです。今でも、津波と聞くと、たとえ注意報であっても家族と逃げるようにしているそうです。

「今度（津波が）来た時どうなんだろう、逃げれんのかなって。一回経験しているので、もう恐怖なんですよね。（避難する時に）長靴を履こうにも震えて履けない、もたついてしまうのが情けなくなる。何カ月も津波のテレビや雑誌の映像は見れなかった、詰まるものがこみあげてくるのでチャンネルを変えてました…。一年ほど経ってようやくやっとこんなだったんだって、少しは見れるようになってきました。」

相当混乱した状況の中で精一杯の行動をとりながらも、おばを助けられなかったという罪悪感も感じておられるようです。敦子さんの心の苦しみ、痛みの体験は当事者でなければわかりません。

被災者の被害程度や体験のつらさ、くやしさ、悲しみは異なります。私たちが顔見知りでないからこそむしろ体験を話してくださることもあります。読者のみなさん、機構の傾聴ボランティアにもご参加ください。社会的弱者に笑顔を そして共生の伴走者になりましょう。

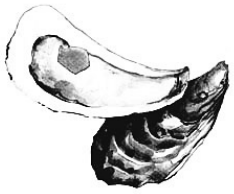
牡蠣（カキ）の養殖ボランティア（その一）

鈴木　武八（第18、24次）

宮城県石巻市万石浦の「種ガキ」は、日本だけでなく、世界的にも有名です。宮城県では、一六〇〇年代に松島湾で行われた地まき養殖が始まりとされています。すでに三百年を超える歴史があります。農林水産省によると、二〇〇九年の種ガキの全国販売量約87万連（一連は貝60枚分）のうち、宮城産は約七十万八千連と八割以上を占めます。カキ、ワカメ、昆布、ホタテなどの漁業者が加入する宮城県漁業協同組合によりますと、東日本大震災で約一万六百人の組合員のうち四百三十人以上が死亡または行方不明となりました。

二〇一三年四月、男性三名、女性二名の養殖班が渡波の丹野靖識（やすのり）（36歳）さんを訪問します。作業場は鹿妻（かづま）と言う田畑に囲まれた一角です。作業工程を教えていただきました。

ホタテの貝殻の中央部分に小さな穴をあけます。アイスピックのようにとがった穴あけ用のハンマーを使います。山積みされたホタテの貝殻の仕分けをします。丸みのある白いワンコと平たい赤みがかったサラッコに、次に大小と仕分けをします。次はワンコ、サラッコに穴を開ける作業です。できるだけ中央部分に穴を開けるように指示されます。



牡蠣（カキ）

地元の石川さん、阿部さんたちご婦人は、慣れています。あれよあれよという間になさり、少しくらいのずれなら良いですよ、と言われるのです。もしかしたら、我々は、仕事の邪魔をしているのではないかとさえ思ってしまいます。強過ぎると、穴が大きくなり、弱いと針孔みたいで、やり直すと、穴が二つ、三つと開いてしまいます。

採苗器（さいびょうき）つくり

少し風が吹きますが、日差しもあり、屋外での作業にしては、快適です。

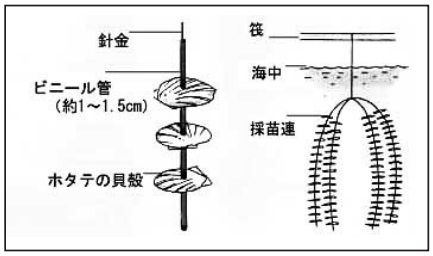
三時を過ぎた頃に、休憩しましょう、との声が掛かり、ティータイムです。作業場の皆さんから、お茶、お菓子などの差し入れをいただき、恐縮しました。作業場の皆さんには、子供の頃ここの海で遊んだ話、お子さんやお孫さんの話、震災時のこと等、色々なお話に時間を割いていただきました。気が付けば、時間も午後四時近くになっています。各班が集合する時間です。中途ながら、第一日目の作業を終了して、厚かましくも、丹野さんの車で、機構の集合場所まで送っていただきました。養殖班、在宅被災者の傾聴ボランティア班合流後、マイクロバスで農の班を迎えに行き、まだ明るいうちに、大街道の温泉、元気の湯へ移動しました。入浴、夕食をゆっくり済ませ、途中、コンビニに寄り、買い物をして、宿泊先である、教育空手道場「修空館」へ向かいました。やや離れた場所にある道場ですが、道場長と懇親後、前夜の車中とは違い、寝袋の中ながら、手脚を伸ばして、就寝出来ました。やや冷え込みを感じましたが、朝六時の起床時間迄、充分な睡眠がとれました。

起床後、全員で道場の掃除、雑巾掛けをして、道場長の見送りを受け、七時半に出発、通勤渋滞のなか、渡波を目指しました。又、途中でコンビニに寄って、朝食、飲み物等買い込んで、車中で朝食を済ませ、それぞれの作業班の持ち場へと向かいました。

養殖班は、九時に作業場入りです。前日の作業の続きと、昨日の打ち合わせ通り、現場に行ってから丹野さんの指示に従います。二日目は、農の班から女性が一人、養殖班へ加わり、六名での作業です。マイクロバスを降りて、作業場に入ると、ホタテの貝殻の山では、もう作業が始まっていました。又々、作業されている地元のご婦人たちの手を止めさせてしまいました。

夏、卵からかえったカキの幼生（ようせい）（赤ちゃん）は、約二週間、海の中をただよいながら過ごします。その後、幼生は海水中の固い物にくっつく習性があります。そこでこの時期にホタテ貝の貝殻を海中に入れておきますと、うまいぐあいに、カキ幼生（約0.3㎜）が付着します。幼生を付着させることを採苗（さいびょう）と言います。

毎年七月中旬頃から九月中旬頃まで行います。



採苗器（ホタテ貝に穴をあける作業）

（次号に続く）

株式会社 チュチュアンナ
代表取締役社長
上田　利昭
tutu anna

MiYOSHi
ミヨシ石鹸株式会社
〒130-0021
東京都墨田区緑3-8-12
TEL 03-3634-1341

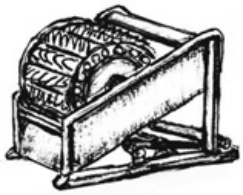
竹中工務店
www.takenaka.co.jp

新生田川共生会
（ホームレス自立支援の会）
TEL 078-392-0327
東日本大震災以降、
神戸国際支援機構に協力

稲刈り（その三）

山本　智也

石巻森林組合の鈴木健一組合長は、代表がご自宅を訪問した際、納屋などを見せてくださいました。足踏脱穀機を貸してくださると気持ちよく言われたそうです。鈴木さんは収穫祭にもかけつけて、神戸の若者たちをいつも励ましてくださる恩人です。炭焼きなどもさせていただいています。



阿部勝さんが鈴木さん所有の大正時代の脱穀機を重いにもかかわらず、運んでくださっておられました。労苦にボランティア一同は感激しました。

足踏脱穀機は一九一〇（明治43）年に「千歯」にとってかわりました。大正の末からは電機モーターになり、今では機械コンバインの時代です。参加者のだれしもが生まれて初めて見ます。

東北では稲扱きとよびます。脱穀は稲穂の束の籾（殻のついたままの米）を穂から引き離す作業です。天日干ししておいた稲を「稲架掛け」からおろします。

稲扱き

脱穀機のドラム部に稲穂を載せます。足でペダルを踏んで、U字型の太い針金を逆に打ち込んだ円筒を回転させます。籾を扱きとります。最初の一俵分（60kg）のお米を脱穀するのに三時間くらいかかりました。

落とした籾をブルーシートの上で藁や屑やゴミから分けます。

一粒も無駄にはしません。子供の時、ご飯粒を残したりすると、お百姓さんが丹精込めたお米を粗末にしてはいけないと、大人は注意したものです。

近年の機械では籾に傷がつきますが、昔の脱穀機は食品にやさしいです。

お米をとったあとの茎の部分が藁です。藁細工に用います。箕（雨具）、藁人形、畳、縄、屋根、わら半紙、米俵などを作ります。また、藁は牛のえさとなり、牛フン堆肥を作ります。僕たちの目指す「田・山・湾の復活」には欠かせません。稲は無駄なくすべてが使われます。昔の人の知恵です。収穫に向けて家族や村の仲間と力を合わせて、心をひとつにして成し遂げます。里山を取り戻すのに田植え、稲刈り、脱穀はとても大切な接着剤の働きです。

みんなで脱穀したお米を渡波の収穫祭で食べていただけると考えると作業は楽しくてしようがありません。

脱穀後

石巻かほく

平成２５年（2013年）６月８日（土曜日）

神戸の支援団体 水田20アール田植え

ローズマリー植樹も

石巻・沢田地区

東日本大震災で大きな被害を受けた石巻市渡波地区で支援活動を続けている一般社団法人神戸国際支援機構（岩村義雄代表）のメンバーが先日、同市沢田の水田で田植えをした。

神戸市から岩村代表ら10人が参加。地元の農家が所有する水田約20アールで2日間をかけ、つや姫の苗を手で植えた。作業終了後、沢田地区の沿道沿いにローズマリーの苗も植樹した。

コメは、11月4日に渡波公民館で開かれる渡波地区振興協議会主催の収穫祭で、おにぎりにして住民に振る舞う予定。支援機構は震災後間もなく石巻に入り、ボランティア活動を展開。今も月1回ペースで20人前後が渡波地区を訪れ、在宅高齢者らが対象の傾聴ボランティアなどに尽力している。田植えは被災農家の手伝いを兼ね、昨年から始めた。

田植えに励む神戸国際支援機構のメンバー＝石巻市沢田

手で田植えを楽しむ（河北新報 2013年6月8日付）

SERVING MANKIND
Humanity First
「ヒューマニティ・ファスト」
日本アハマディア・ムスリム協会

法律相談初回無料。
お気軽にご相談下さい。
宮永法律事務所
弁護士 宮永堯史　弁護士 松田康生
〒650-0016 神戸市中央区橘通1-2-14
0120-997-181
TEL 078-351-1325 FAX 078-351-1270

特定非営利活動法人
みもざ
TEL 078-262-0460
医療・保健介護・
福祉・教育に関する事業
共生社会の実現

不動産 売買・賃貸・管理・店舗は
本田商会
〒662-0051 西宮市羽衣町５－23
電　話：0798-38-7560
ＦＡＸ：0798-38-7561
お気軽にご相談ください。

ヤマザキ
世界のパン
ヤマザキ

KINSAN
夢に近づく
夢を産み出す…
近畿産業信用組合
総合コールセンター
0120-111-019

連載「田・山・湾の復活」（その三）
自然と共に生きる

岩村　義雄

東日本大震災の年、宮城県石巻市牡鹿半島を訪問しました。シカの名前が至るところにあります。アイヌの人は鹿がとれるとカムイ（アイヌ語「神」）に祈りました[4]。

リアス式の海岸線は津波で家、命、仕事はすっかり流し去られています。案内してくださった阿部捷一氏はかつて地域の小学校の校長です。沖から半島を見ますと、緑豊かな山並みです。カエデやコナラなどの広葉樹が繁っています。森に入ると、腰まで落ち葉に埋まるほどです。落ち葉の下には長年にわたり積み重なってきた腐葉土があります。カブトムシ、クワガタムシがもぐっているのをみつけようと手をいれると、キノコの臭いがします。

宮城県気仙沼湾で「森は海の恋人」の運動をすすめている畠山重篤さんがいます。衰えた海の力をよみがえらせるために、海に注ぐ川、そして上流の森を大切にしなければならないことに気づかれました。湾に注ぐ大川上流の森（室根山）に苗を植えます。一九八九年より50種25万本の広葉樹を子供たちといっしょに植え始めました。山村に住む歌人熊谷龍子さんの「森は海を　海は森を恋いながら　悠久よりの愛紡ぎゆく」という一首から生まれました[5]。

耳を木にあててみると音がします。生きています。詩は樹木を語源としてまさに歴史の中で流れているような響きがあります。

私たちは自分勝手な生き方をして自然をこわしてきました。故郷を忘れた放蕩息子です。「ここを出て父の家に帰り」[6]とふるさとの自然を慕う息子にとり、帰るところは森でしょう。森であるエデンの園には「命の木」と「善悪の知識の木」がありました[7]。森林を守るか、ダムを造るかの迷いを人間は繰り返してきています。東北でもシカが増えて困っています。「命の木」とは、森の苗を大切にし、自然の「生態系」を考えます。一方、「善悪の知識の木」とは、自然を支配するヒトの「生命」を大切に考え、シカの数を減らさざるを得ません。自然の「生態系」それとも人間の「生命」のどちらを先に考えるべきでしょうか。「田・山・湾の復活」とは両方を考えながら、みんながそうだとうなずく道を開きます。他の生き物といっしょにつながりをもって自然と共に生きていくのです。

4 神戸国際支縁機構「牡鹿半島 聞き取り調査(4)」二〇一一年七月二日
5『歌集・森は海の恋人』（熊谷龍子 北斗出版 一九九六年）
6 ルカ15章18節『新約聖書 柳生直行訳』（新教出版社 一九八五年）
7 創世記2章9節『新共同訳』

右側 畠山重篤夫妻ご自宅にて
左側 村上裕隆事務局員
2012年12月18日

ご協力を感謝します。

2013年4月1日～7月17日

藤井浩、阿部捷一、アシュラムセンター、内藤幸子、兵庫キリスト者障害者共励会、東垂水ルーテル教会（バザー）、吉岡成幸、朝比奈恵子、石田朝子、小島芙美子、白瀬悦子、長濱啓、イエス・キリスト聖成伝道教会、山本幹彦、村上タカ、藤木智代、藤田眞弓、ゲーベルひでみ、遠藤トシ江、保田薫、川端勝、酒井彰、小谷良一、川口繁市郎、飯原洋子、飛田雄一、本田哲郎、忍ヶ丘キリスト教会、橋本祐樹、宮本博美、東中香代、加山久夫、西上千栄子、濱岡京子、西佑華、畠中美希、千葉幸一、島薗進、玉理隆司、松本裕之、栫和彦、原田洋子、杉田哲、近藤剛、佐野賢治、三浦敏壽、勝村弘也、守屋香代子、岸本豊、古本純一郎、古本佳世子、塩屋キリスト教会、村上安世、亀山繁、石井亮一、毛藤智夫、宮永堯史、白石喜久夫、中外日報社、鍋島隆、吉川潤、西川一樹、本田大輔、ヒューマニティ・ファスト、廣森勝久、廣森孝子、岩村義雄、水垣渉、大田正紀、大田きみ子

内藤幸子画伯展で東北被災地用のポストカードの売り上げ、ひびき福祉会の野菜等、西福寺、光円寺のもちごめに感謝。

合計 1,115,250円　出納 村上裕隆

㈳神戸国際支縁機構

•ボランティアや移住者募集中

毎月、被災地へ赴きます。農林漁、および在宅被災者戸別訪問にご協力ください。医療関係者歓迎します。詳細はホームページ。

•被災地への支援物資もお願いします。

•年会費をお願いします。

会員（年度4月～翌3月）の皆さまには、季刊誌などをお送りします。

事務局長　本田 寿久

趣旨に賛同してくださる方は、何口でも結構ですので、ご協力をお願いします。

本会員は、　一口　2,000円/1年
賛助会員は、一口　5,000円/1年

• 郵便振替　口座　00900-8-58077
　加入者名　一般社団法人 神戸国際支縁機構
• 三菱東京UFJ銀行
　462（三宮支店）　普通 3169863
　神戸国際支縁機構　岩村義雄

編集後記

中国四川省における豪雨。四川省は日本の1.3倍、人口8、600万人ですから、被災面積も広く、被害者の数もまだ把握できていません。床上浸水は600万件以上に上ります。7月21～24日に汶川県に赴きました。現地に立って見ますと、高層ビルも押し流され、逃げ場を失った犠牲者の死臭がします。中国政府の軍隊が現場で不眠不休で重機を用いての復旧作業、また、赤十字、NGOも医療面で活動しています。4月20日のM7級の大地震もあり、地盤がゆるんでいます。災害復旧で驚かされるのは被災した中心地が記念公園、モニュメントに変貌していることです。中国全土からたくさんの観光客が押し寄せ、週末には地方にもかかわらず交通渋滞です。日本では阪神・淡路大震災にしても遺族が思い出したくないということを配慮し、被災建造物などを撤去してしまいます。しかし、廃墟となった映秀（インシュウ）学校跡もそのまま残しています。2008年5月12日の震災を語り伝え、犠牲者も共に生きている証しになっていることを教えられます。　（Y.I）